



激動の時代 幕末期の日本を 記録した資料

1860年代にさかのぼる貴重な
紙面データをジャパントイムズ
アーカイブに追加しました



2018年は明治維新から150年の大きな節目の年を迎えます。幕末から明治政府誕生に至る激動の時代に発行された旧ジャパントイムズをデジタル化してアーカイブコンテンツに追加することになりました。150年前の社会情勢が読み取れる数少ない貴重な資料を研究にお役立てください。

現ジャパントイムズが発行される30年ほど前の1865年9月8日（慶応元年7月19日）に旧ジャパントイムズがイギリス人チャールズ・リッカビーにより創刊されました。今回収録されたコンテンツ『幕末期のジャパントイムズ』には日本の歴史に深く影響を与えたとされる英国人外交官アーネスト・サトウの寄稿記事（後の『英国策論』の元となる記事や「遣欧使節日記」の抄訳）など貴重な資料が含まれます。特に『英国策論』は明治維新に大きな影響を与えたとされています。サトウが投稿したのはわずか22歳の時でした。

『幕末期の ジャパントイムズ』

📅 発売日：2018年4月27日

📅 収録期間：1865年9月
～ 1866年6月

📖 収録内容：全223ページ、
週刊版4～8ページ建て、
出入港する外国船案内・商
業広告、内外ニュース、在
日領事館の公告、裁判記事

🔑 認証方式：IPアドレス
認証

📦 販売形態：
① 既存のジャパントイムズ
アーカイブにオプションと
して追加購入
② 単独購入

the japan times

THE JAPAN TIMES ARCHIVES

販売元：株式会社ジャパントイムズ

メディア事業局 販売部

電話：03-3453-2337 | email: jtarchives@japantimes.co.jp | http://jtimes.jp/archives

味では、一番は商業です。港は世界とつながる、人とつながる場所でした。

大門：明治に入って日本語の新聞も発行され始めましたが、日本人が旧ジャパントイムズからヒントを得たことも考えられるでしょうか？

鈴木：ええ。英字新聞は発行された1860年代に助走路を作ったといえます。英語はともかくとして、紙面に出た記事などを含め、日本人に新聞とはどういうものかということを植え付けていったと思います。

大門：紙面からは当時の様子が分かりますよね。例えば、どういう犯罪が多かったとか。

鈴木：ええ、旧ジャパントイムズ社から何か盗まれたというような記事もあって。僕は新聞がいかに社会のことを示しているかという点に非常に関心がありまして、新聞は世相紙といえます。研究者としてはそうしたところに歴史的価値、資料的価値があると思っています。

大門：ローカルな話題も出ていますよね。

鈴木：競馬やボートレースなどスポーツ関係の記事も出てきます。横浜には自国民保護のためイギリスの連隊が置かれていましたが、軍関係の人たちが競馬、ボートを始めました。クリケットやライフル射撃みたいなものもありましたね。フットボールクラブも1866年くらいまでにはできていたようです。こうした記事はスポーツというよりも、自分たちのコミュニティの情報といった感じですね。ある意味、ローカルニュースペーパーと位置付けられると思います。

大門：あとは貿易の話題も出ていて、シルクの話とか出ていましたね。

鈴木：当時は貿易について、何がメインで伝えられているかという絹じゃないですか。多く報道されているということは、社会的ニーズがあるということです。横浜には群馬から生糸が来ていました。

大門：そのシルクが横浜から海外に出て行くということですね。

鈴木：そうです。それで船はいつ入ってくるとか、そういう情報がある程度大きく扱われていたわけです。日本初の日本語日刊新聞である横浜毎日新聞に、初期に掲載されていたのはほとんどそうした情報でした。

大門：読んでみて他には、当時はまだ今のような新聞の書き方のスタイルは確立されていなくて、意見が書かれているという印象を持ちました。「we」という言葉がよく使われていて、この時代の人たちがどういう思いを持っていたのかが分かり、面白いと思いました。



研究資料を見せながらインタビューにこたえる鈴木雄雅教授

撮影：三浦義昭



1865年9月29日号に掲載されたアーネスト・サトウによる「遣欧使節日記」の抄訳

鈴木：そうですね。この時代は印刷関係の人たちがこういう媒体を作り、購読料をとれますから、新しい収入先になったわけです。だから始めたんですね。記事はこう書いたら人々に読まれる、買われるということが分かってきて、徐々にジャーナリストが生まれてくる。

大門：一方で、日本を読み解く上でも旧ジャパントイムズが使われた可能性はありますか？

鈴木：ええ。外国航路の船舶の出航にあわせて、月に2回ぐらい、旧ジャパントイムズを海外にも送っていました。旧ジャパントイムズに掲載された記事を海外向けに再編集したものです。日本の文化や社会についての記事が多いですから、編集者は意識したんでしょうね。旧ジャパントイムズは、海外向けのものを出して、日本の社会・文化を知らせる役割を果たしたことは事実ですね。

大門：われわれとしてはこの旧ジャパントイムズを多くの方に読んでいただきたいと思っ



1866年3月16日号に掲載され、後に『英国策論』と呼ばれるようになったアーネスト・サトウが匿名で寄稿した記事

ていますが、改めてこの新聞は研究者の方々にとってどういう歴史的価値がありますか？

鈴木：1860年代、幕末から開国へ向かう中で日本の様子、社会事情を示している数少ないものです。60年代後半になると日本語の新聞が出てきますが、幕府のコントロール下にあり、それらはある程度制限された中で発行でした。

大門：旧ジャパントイムズは幕府のコントロール下ではなく、比較的自由に書かれていたと。

鈴木：英字新聞のポイントは自由に書けていたことにあると思います。また新聞はこの当時、主観的に書かれていましたから、公文書に「事実」として書かれていることに対する人々の見方が表われていたといえますね。さらに、英字新聞を通してジャーナリズムが確立していく段階が見てとれます。これだけのものが残っていて、ある一定の期間見られるので、非常に重要な資料だと思います。

横浜から世界に日本の情報を発信

1860年代半ばの様子が知れる 貴重な資料のデジタル化

上智大学教授 鈴木雄雅
(専門：ジャーナリズム史)

デジタルアーカイブに収録されている旧ジャパントイムズは、1865年9月8日（慶応元年7月19日）、西インド中央銀行の元横浜支店支配人であったイギリス人銀行家チャールズ・リッカビーによって横浜の外国人居留地で創刊され、英字新聞の草分け的存在の一つである。4～8ページ建てで、週刊で発行された。

1859年に開港した横浜ではジャパントヘラルド（1861年創刊）やジャパントパンチ（1862年創刊）、ジャパントコマーシャルニュース（1863年創刊）が発行され、海外の情報が流れ込み始めていた中、旧ジャパントイムズも発行された。

旧ジャパントイムズは船舶情報や商業広告、国内外のニュース、裁判記事を掲載しており、幕末、開国時にかけて揺れ動く日本社会の様子を、外国人の眼から見た貴重な記録である。裁判記録、商業会議所記録、領事館公告のみならず競売や電信広告などを通して、1860年代半ばの居留地の様子を知ることができるのは興味深い。旧ジャパントイムズはロンドンやパリに通信員を置き、横浜の地から世界に向けて情報を発信していたといえる。

本デジタルアーカイブでは、旧ジャパントイムズの創刊号（1865年9月8日付）から1866年6月30日付までの42号分を閲覧することができ、幕末日本の社会・世相を読み取ることもでき、貴重な史料といえる。

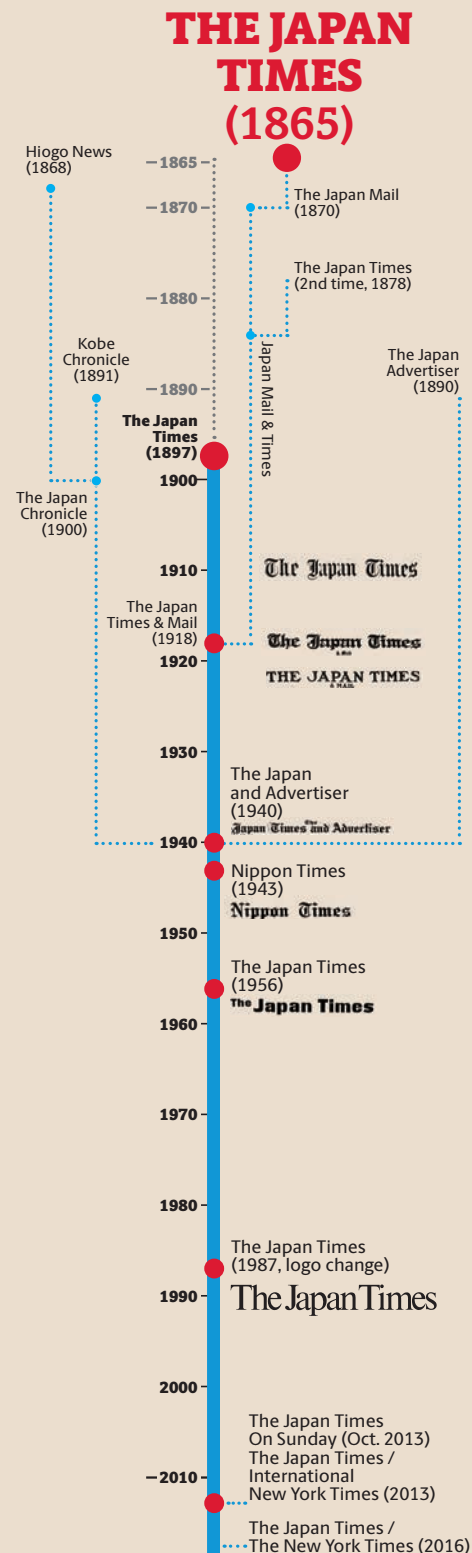
旧ジャパントイムズは副題に「商業・政治・一般ニュース週刊紙」と掲げ、貿易第一主義を標榜した。貿易商品の輸出入状況や市場情報など経済ニュースを多く取り上げていた。横浜では当時、ジャーディン・マセソン商会（長崎ではグラバー商会）のような巨大商社が台頭する一方、神戸の開港は遅れていた。日本経済を取り巻く諸問題を中心に紙面で訴えようとしたのであろう。

その一方で、英国公使館通訳のアーネスト・サトウによる「遣欧使節日記」の抄訳（第2号から）や『英国策論』（“British Policy”）（第28号はじめ、3回にわたり掲載。翻訳されたものが市中に出回り大きな反響を呼んだ）なども掲載されている。

こうしたこともあってか、旧ジャパントイムズは会訳社（旧番所調所）が『日本新聞』の題字で筆写し、翻刻新聞として訳され、出版されていた。邦字紙にも、しばしば「横浜新聞紙タイムズより抄出す」として記事が訳出されていたのである。

なお、このデジタルアーカイブに収録されている旧ジャパントイムズとは別に、ジャパントイムズ・デイリー・アドバタイザーという広告主体の日刊版、さらに外国航路の船舶の出航に合わせ、ほぼ隔週で発行されたジャパントイムズ・オーバーランド・メールも出版されていた。

このように、本資料は幕末期における外国人居留地の様相を多角的に読み取ることができ、当時の政治・経済・社会・文化を知ることができる貴重な英字媒体といえる。



the japan times

The Japan Times
(2017, 120th Anniversary, Redesign)